

## 国際日本研究学位プログラム（博士後期課程）

Doctoral Program in International and Advanced Japanese Studies

- 博士（国際日本研究）
- Doctor of Philosophy in International and Advanced Japanese Studies

## 人材養成目的 / Program Educational Objectives

グローバル化の進展する社会において、国際的かつ比較研究の視座から日本の文化・社会を探究し、人文科学・社会科学・日本語教育学を架橋する研究力と教育力を備えた研究者・教育者を養成する。さらに、これら三領域における専門的かつ国際的な学識を涵養し、その成果を国内外に発信しうる世界的水準の人材を育成する。

<b>養成する人材像</b>	グローバルな視点から現代日本の特質を解明するために、幅広い専門知識と俯瞰的な視座を涵養し、基礎的素養と関連領域の学修を通じて、高度専門職および研究職を担いうる能力を有する人材。さらに日本語教育においては、国際的な研究・教育領域を深化させ、専門的学識を世界に発信し得る研究力・教育力を備えた高度専門人材。
<b>修了後の進路</b>	卒業後の進路は幅広く、大学・研究所・民間シンクタンク等の研究職・教育職に加え、海外拠点を持つ日本企業や商社、外国企業、官公庁・自治体、国際公務員、日本語教育機関、国際関係組織、メディア関連機関などが挙げられる。進路は日本国内のみならず、シンガポール、ベトナム、中央アジア、南米、中国、タイ、韓国、台湾など、広く海外にも開かれている。

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士後期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、博士（国際日本研究）の学位を授与する

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の創成力：未来の社会に貢献し得る新たな知を創成する能力	①新たな知の創成といえる研究成果等があるか ②人類社会の未来に資する知を創成することが期待できるか	大学院共通科目、プロジェクト演習 3A、3B、4A、4B などの専門科目、研究指導科目、論文発表に関する科目、博士論文作成、中間発表、学会発表、研究会発表、ポスター発表、論文投稿等
	2. マネジメント能力：俯瞰的な視野から課題を発見し解決のための方策を計画し実行する能力	①国際日本研究分野に関連する課題に対して長期的な計画を立て、的確に実行することができるか ②専門分野以外においても課題を発見し、俯瞰的な視野から解決する能力はあるか	大学院共通科目、プロジェクト演習 3A、3B、4A、4B などの専門科目、研究指導科目、演習科目、他研究室と共同の演習科目、インターンシップ科目、達成度自己点検、博士論文作成、中間発表、学会発表、研究会発表、ポスター発表、論文投稿、外部コンテス等への参加等
	3. コミュニケーション能力：学術的成果の本質を積極的かつわかりやすく伝える能力	①異分野の研究者や研究者以外の人に対して、研究内容や専門知識の本質を分かりやすく論理的に説明することができるか ②専門分野の研究者等に自分の研究成果を積極的に伝えとともに、質問に的確に答えることができるか	大学院共通科目、プロジェクト演習 3A、3B、4A、4B などの専門科目、研究指導科目、演習科目、研究発表に関する科目、中間発表、学会発表、研究会発表、ポスター発表等
	4. リーダーシップ力：リーダーシップを発揮して目的を達成する能力	①社会的意義と説得力を備えた目標を設定することができるか ②その目標を実現するために必要な体制を整え、リーダーとして計画を推進し成果を達成する能力があるか	大学院共通科目、プロジェクト演習 3A、3B、4A、4B などの専門科目、研究指導科目、特別指導科目、他研究室と共同の演習科目、大学院共通科目（JAPIC 科目）、TA（大学院セミナー等）経験、プロジェクトの参加経験等
	5. 国際性：国際的に活動し国際社会に貢献する高い意識と意欲	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する高い意識と意欲があるか ②国際的な活動に十分な語学力を有するか	大学院共通科目（国際性養成科目群）、比較文学論 2A などの専門科目、外国語の演習科目、国際的な活動を伴う科目、外国語文献を利用した博士論文作成、国外での活動経験、外国人（留学生を含む）との共同研究、TOEIC 得点、国際会議発表、英語論文投稿等

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	6. 研究力：国際日本研究分野における最新の専門知識に基づいて先端的な研究課題を設定し、自立して研究計画を遂行できる能力	①国際日本研究分野における先端的な研究課題を設定する能力を身につけたか ②国際日本研究分野において自立して研究計画を遂行する能力を身につけたか	大学院共通科目、プロジェクト演習 3A、3B、4A、4B などの専門科目、研究指導、博士論文作成、論文投稿、学会発表、研究会発表、ポスター発表等
	7. 専門知識：国際日本研究分野における先端的かつ高度な専門知識と運用能力	①国際日本研究分野における先端的かつ高度な専門知識を身につけたか ②国際日本研究分野における専門知識の総合的な運用能力を身につけたか	大学院共通科目、比較文学論 2A などの専門科目、研究指導、博士論文作成、中間発表、論文投稿、学会発表、研究会発表、ポスター発表等
	8. 倫理観：国際日本研究分野の研究者にふさわしい倫理観と倫理的知識、および専攻する特定の分野に関する深い倫理的知識	①国際日本研究分野の研究者または高度専門職業人にふさわしい倫理観と倫理的知識を身につけたか ②専攻する特定の分野に関する深い倫理的知識を身につけたか	大学院共通科目（生命・環境・研究倫理科目群）、研究法入門、国際日本研究のための日本語、国際日本研究のための英語、プロジェクト演習 3A、3B、4A、4B などの専門科目、演習科目、研究指導、博士論文作成、中間発表、INFOSS 情報倫理、APRIN e-learning 等
学修成果の評価に関する方針	<p>学修成果の評価は「達成度評価表」に基づく達成度評価によって以下の段階毎に学位授与の方針に基づくコンピテンスの修得状況を客観的に確認し評価する。達成度評価の段階・方法を以下に示す。</p> <p>本学位プログラムでは、「学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）」に掲げる知識・能力（コンピテンス）の修得状況を的確に把握し、学修成果の評価と教育指導に反映させるための仕組みを整えている。具体的には、学生による「コンピテンスシート」の記入を学期ごとに実施しており、各コンピテンスに関連づけられた修得単位の進捗や、学修の到達状況を振り返る機会を設けている。提出されたシートには事務室による確認とコメントが加えられた後、担当教員と学生との間でレビューを行い、修了までに確実に達成できる見通しを立て、教員からの所見が記入されるのをカリキュラム委員会で確認し、最終的にはコンピテンススコア到達状況は、各自の学位論文審査委員会が論文審査時に審査することで、学修支援と学習計画の調整に役立っている。このプロセスを通じて各コンピテンス領域ごとの修得状況を数値化し、進捗のバランスを図表（レーダーチャート等）により可視化している。これにより、学生自身が今後の履修や学修の重点を把握しやすくなり、計画的・主体的な学びの促進につながっている。</p>		

<b>学位論文に関する評価の基準</b>	<p><b>(審査体制)</b></p> <p>(1) 専門委員会委員（審査専門委員）のうち、少なくとも主査1人（研究指導）と副査2人（研究指導または授業担当）の合計3人は、当該審査研究群教員会議の構成員から指名するものとし、主査1人と副査の半数以上は、人文社会科学研究群（博士後期課程）国際日本研究学位プログラム教育会議の構成員から指名するものとする。</p> <p>(2) 人文社会科学研究群（博士後期課程）国際日本研究学位プログラムに所属する審査専門委員のうち少なくとも1人は、博士の学位を有する者であるものとする。</p> <p>(3) 人文社会科学研究群（博士後期課程）国際日本研究学位プログラムに所属する審査専門委員のうち少なくとも1人は、審査専門委員会解散後引き続き1年以上にわたって国際日本研究学位プログラム（博士後期課程）教育会議構成員の研究指導担当教員であるものとする。</p> <p>(4) 本学教員で学術院・研究群の授業担当教員でない場合にも、当該学位論文審査に不可欠であると認定される場合には、その者を審査専門委員会の副査に加えることができる。</p> <p>(5) 当該学位論文審査専門委員会に不可欠であると認定される場合には、本学の他の学術院・研究群等、他大学の大学院又は他の研究所等の教員等を審査専門委員会の副査に加えることができる。</p> <p><b>(評価項目)</b></p> <p>学位論文の審査は次の項目に基づいて行っていること</p> <p>① 課題の設定が適切であり、かつ独創性を有していること</p> <p>② 論旨が明確であり、かつ一貫性を有していること</p> <p>③ 正確な用語を用いて完成度の高い分析を行っていること</p> <p>④ 先行研究の成果を十分に把握し、かつ発展的に運用していること</p> <p>⑤ 文献・資料を適切に使用していること</p> <p>⑥ 体裁及び構成が適切であること</p> <p>⑦ 当該分野において高度な学術水準に達し、かつ新たな学術的貢献が認められること</p> <p><b>(評価基準)</b></p> <p>上記の評価項目すべてを満たす学位申請論文を、審査又はコンピテンスの確認を経た上で、合格とする。</p>
----------------------	---

### 教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

人文科学、社会科学、日本語教育学の3領域を横断する国際日本研究の高度な研究力・先端的な専門知識・深い倫理観とともに、人文社会科学の幅広い基礎的素養、人文社会ビジネスにわたる広い視野、社会の多様な場での活躍を支える汎用的知識・能力を養う教育・研究指導を行う。

<b>教育課程の編成方針</b>	<p>学生の主たる研究関心を軸として、関連する分野の基礎的素養や広い視野、汎用的知識・能力の涵養に資するよう大学院共通科目、研究群共通科目から1単位を履修することを推奨する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>- 大学院共通科目、プロジェクト演習 3A、3B、4A、4B などの専門科目、リサーチ・プログラム開発、博士論文作成、学会発表などにより、未来の社会に貢献し得る新たな知を創成する能力（1. 知の創成力）を身に付ける。</li> <li>- 大学院共通科目、プロジェクト演習 3A、3B、4A、4B などの専門科目、達成度自己点検、外部コンテスト等への参加などにより、俯瞰的な視野から課題を発見し解決のための方策を計画し実行する能力（2. マネジメント能力）を身に付ける。</li> </ul>
------------------	---

<p><b>教育課程の 編成方針</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>- 大学院共通科目、プロジェクト演習 3A、3B、4A、4B などの専門科目、学会発表、ポスター発表などにより、学術的成果の本質を積極的かつ分かりやすく伝える能力(3. コミュニケーション能力) を身に付ける。</li> <li>- 大学院共通科目、プロジェクト演習 3A、3B、4A、4B などの専門科目、TA（大学院セミナー等）経験、プロジェクトの参加経験などにより、リーダーシップを発揮して目的を達成する能力（4. リーダーシップ力）を身に付ける。</li> <li>- 大学院共通科目、比較文学論 2A などの専門科目、国外での活動経験、外国人（留学生を含む）との共同研究、TOEIC、国際会議発表、英語論文作成などにより、国際的に活動し国際社会に貢献する高い意識と意欲（5. 国際性）を身に付ける。</li> <li>- 大学院共通科目、プロジェクト演習 3A、3B、4A、4B などの専門科目、リサーチ・プログラム開発、研究指導、博士論文作成、学会発表などにより、人文社会科学分野及び国際日本研究分野における最新の専門知識に基づいて先端的な研究課題を設定し、自立して研究計画を遂行できる能力（6. 研究力）を身に付ける。</li> <li>- 大学院共通科目、比較文学論 2A などの専門科目、リサーチ・プログラム開発、研究指導、博士論文作成、学会発表などにより、人文社会科学分野及び国際日本研究分野における先端的かつ高度な専門知識と運用能力（7. 専門知識）を身に付ける。</li> <li>- 大学院共通科目（生命・環境・研究倫理科目群）、プロジェクト演習 3A、3B、4A、4B などの専門科目、研究指導などにより、人文社会科学分野及び国際日本研究分野の研究者にふさわしい倫理観と倫理的知識、および専攻する特定の分野に関する深い倫理的知識（8. 倫理観）を身に付ける。</li> </ul>
<p><b>学修の方法 特色的な教育</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>- 「プロジェクト演習」は、博士論文の構想や中間成果を多数の教員や博士後期課程の学生たちの前で発表することで、プレゼンテーション能力を高めつつ研究を深めてゆくことをめざす。</li> <li>- 他の専門科目は研究テーマと関連の深い領域の高度な演習を通じて、関連する幅広い知識を習得しつつ博士論文の構想を彫刻することをめざす。</li> <li>- 8つのコンピテンスそれぞれについて修得基準を設け、1年次終了までに基準の5割以上、2年次終了までに基準の7割以上、3年次終了時に基準を満たすことを目指して学修する。修得基準は学生に対して別途掲示する。</li> </ul> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 知の創成力</li> <li>2. マネジメント能力</li> <li>3. コミュニケーション能力</li> <li>4. リーダーシップ力</li> <li>5. 国際性</li> <li>6. 研究力</li> <li>7. 専門知識</li> <li>8. 倫理観</li> </ol>

入学者受入れの方針 / Admission Policy

<p><b>求める人材</b></p>	<p>国際的・比較的な視野のもとに日本の文化・社会について研究し、その成果をもとに、日本や東アジアを中心に世界が抱えるさまざまな問題に主体的に取り組んでいく意欲をもつ学生および社会人。後期課程ではこうした課題に対して研究者としてあるいは高度な研究能力を持つ職業人として、真摯に取り込む意欲を持つ学生や社会人を広く求める。</p>
<p><b>入学者選抜方針</b></p>	<p>入学者の選抜にあたっては、一般入試、推薦入試、社会人特別選抜などの入学者選抜方式によって多様な入学志願者に対応するとともに、募集人員を分割し、同一年度に複数回の入学試験を実施する。また、入学機会を4月だけではなく、10月にも提供する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>- 一般入試では、専門科目の筆記試験、及び口述試験を実施し、総合的に判定する。専門科目は、国際日本研究に関する「政治」「経済」「文学・文化・思想」「法律・社会・メディア・情報」「言語学」「日本語教育学」の分野から1つ出願時に選択した科目について日本語または英語（「日本語教育学」は日本語のみ）で解答させ、博士後期課程において高度な国際日本研究を遂行しうる専門的能力、研究しようとしている分野の専門的知識を判定する。専門科目は、博士論文を執筆する言語で解答させるので、解答における語学力、及び修士論文や研究計画書等の書類の語学力で判定するため、外国語の筆記試験は行わない。口述試験は、研究計画書等を参考とし、学修成果や思考力、語学力、研究に対する情熱・意欲、研究しようとしている分野の専門的知識に加え、プレゼンテーション能力やコミュニケーション能力も判定する。</li> <li>- 推薦入試では、小論文の筆記試験、及び口述試験を実施する。推薦入試は、研究者として大学等研究機関に就職することを目指す修士の学位を取得した、あるいは取得予定の学生、もしくは海外の大学教員や高度職業人を対象とする。受験者は、修士の学位を取得しているか、取得予定であるため、専門科目の試験に代えて、小論文により、専門分野に関する知識、理解力、論理的思考能力等、博士後期課程において高度な国際日本研究を遂行しうる専門的能力を判定する。口述試験は、研究計画書等を参考とし、国際日本研究に真摯に取り組む意欲、研究計画、本学位プログラムを志望する理由、研究しようとしている分野の専門的知識に加え、プレゼンテーション能力やコミュニケーション能力なども判定する。</li> <li>- 社会人特別選抜では、専門科目の筆記試験及び口述試験を実施する。社会人特別選抜は、社会人としての経験を有している者を対象としている。専門科目は、国際日本研究に関する「政治」「経済」「文学・文化・思想」「法律・社会・メディア・情報」「言語学」「日本語教育学」の分野から1つ出願時に選択した科目について日本語または英語（「日本語教育学」は日本語のみ）で解答させ、高度な国際日本研究を遂行しうる専門的能力を判定する。口述試験は、研究計画や社会人として得られた問題意識、研究しようとしている分野の専門的知識に加え、プレゼンテーション能力やコミュニケーション能力なども判定する。</li> </ul>

### 学修支援体制 / Learning Support Framework

<p><b>学修支援</b></p>	<p>本学位プログラムでは、博士後期課程における高度な研究活動を支援し、学術的成果の創出と発信を促進するための学修支援を実施している。学会発表にかかる旅費の支援制度を整備し、国内外の学会での発表機会を積極的に提供することにより、学生が自身の研究成果を国際的な学術コミュニティに発信する力を培う。</p> <p>また、博士後期課程に設けられている演習科目においては、研究の進捗状況を報告・検討し、他の教員や学生との意見交換を通じて、研究成果の精緻化と学術的な思考力の深化を図っている。</p> <p>さらに、指導教員の助言のもと、学会発表を見据えた発表資料の作成や発表練習を行い、専門外の聴衆にも自身の研究内容を的確に伝えるプレゼンテーション能力の涵養にも力を入れている。こうした取り組みは、「リサーチ・プログラム開発」の科目として位置づけられている。</p> <p>このように、研究の創出・深化・発信の各段階を支える多層的な支援体制を通じて、博士後期課程の学生が自立した研究者として成長できる環境を整えている。</p>
<p><b>学生同士の交流機会</b></p>	<p>本学位プログラムでは、学生同士の主体的な交流を促進することにより、学修意欲や研究の質の向上を図っている。その一環として、教員と学生が一同に会する全体集会では、博士後期課程に在籍する学生が、自身の研究内容や学会発表、フィールドワーク等の経験を互いに共有する機会を設けており、異なる分野・関心をもつ学生間での学術的刺激が生まれている。</p> <p>また、博士後期課程の演習科目においては、複数教員の指導のもとで学生が研究発表を行い、他の大学院生との意見交換を通じて、相互にフィードバックを行う環境が整えられている。このような場を通じて、学生同士が専門的知見や研究の進め方を学び合うことができ、思考の深化や視野の拡張にもつながっている。</p>
<p><b>教員との交流機会</b></p>	<p>本学位プログラムでは、博士後期課程における高度な研究活動を支えるため、学生と教員の密接な交流を通じて、研究能力の向上および学術成果の発信力を高める体制を整えている。</p> <p>全体集会では、教員と学生が集まり、研究活動における悩みや課題について率直に意見を交わす機会を設けている。加えて、事前に実施される学生アンケートの結果に基づき、教員からのフィードバックを集会の場で共有することで、教育運営に対する透明性と双方向性を高めている。</p> <p>また、博士後期課程の演習科目においては、指導教員との継続的な対話を通じて、研究の進捗や課題を深く掘り下げることが可能な環境が整えられている。ゼミナールでは、学生が自身の研究成果について発表を行い、それに対して教員が専門的かつ実践的な観点から助言を行うことで、研究の精緻化や成果発信の洗練が図られている。</p>

### 教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

本学位プログラムでは、博士後期課程における高度な研究指導と専門教育の質を継続的に保証・向上させるための体制と取り組みを整えている。

FD委員会を設置し、教育活動全体に対する点検と改善を継続的に実施することで、教育の質を保証し、学位プログラムの目的達成に向けた体制を強化する。教員間での定期的なFD活動を通じて、カリキュラムの構成、研究指導の方法等に関する情報共有を行い、教育研究環境の検証と改善を継続的に進めている。

また、授業評価アンケートを通じて学生から寄せられた意見を検討し、必要に応じて演習や科目内容の見直し、指導体制の調整を行うなど、学生の研究活動を効果的に支援するための改善を実施している。